

場面や状況、目的に応じて、既習表現を柔軟に、 かつ即興的に活用する生徒の育成

聖籠町立聖籠中学校 古川 直哉 (H22年度)

1 研究主題設定の理由

学習指導要領では、「話すこと」が[やり取り]及び[発表]の2領域へと細分化された。実際のコミュニケーションの場では、原稿を準備せずに即興で自分の思いや考えを伝え合うことが多いことから、実生活に生きる英語力を向上させるには、[やり取り]に着目する必要があると考えた。

「『即興で伝え合う』とは、話すための原稿を事前に用意してその内容を覚えたり、話せるように練習したりするなどの準備時間を取ることなく、不適切な間を置かずに関わり手と事実や意見、気持ちなどを伝え合うことである」と学習指導要領で示されている。実生活や社会の中でもあり得る場面や状況を設定し、与えられたシチュエーションの中で自分の意見、考え、情報を相手に伝え合うコミュニケーションの機会を設けたいと考えた。

昨年度、年度初めの授業アンケートでは、「英語の授業で身に付けたい力は何ですか」の問いに、約40%の生徒が「英語を話せるようになりたい」と答えていたのに対し、学年末の授業アンケートでは、「英語の授業で身に付いた力は何ですか」の問いで、約20%の生徒しか「英語が話せるようになった」と答えなかった。この結果は、授業では依然として文法や語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点を置き、話すこと、特に[やり取り]を意識した言語活動が十分ではなかったことを明白にした。「英語を話したい」という生徒の願いにこたえるためには、話すために必要なフレーズの引き出しづくりや、それらを活用して「自分の言いたいことを伝えられた」あるいは「相手の言いたいことが伝わってきた」という達成感が味わえる場面で授業内で意図的に取り入れていく必要があると考えた。

特定の単元や1時間の授業で学習した文法や語彙を活用させるための場面や状況は、日常生活を考えたときに非常に限定的なシチュエーションになってしまうのではないかと考える。逆に、日常生活であり得る場面や状況を設定し、そのシチュエーションの中で既習事項を活用し自由に表現することが、相手との[やり取り]を踏まえた、即興的な英語力を向上させることにつながるのではないかと考えた。疑似的ではあるにしろ日常生活の様々な場面や状況での[やり取り]を経験することによって、将来実生活で似たようなシチュエーションに遭遇したときに実用的な英語力となって発揮されることも期待できる。即興で話す力は、短期間で身に付くものではないため、場面や状況を変えながら、帯活動の中で計画的・継続的に取り組む必要があると考えた。

2 研究仮説

英語の時間において、場面や状況を明確にし、活動のフィードバックを大切にしながら『なりきり small talk』を帯活動として行うことで、発語・発話数が増え、即興的に話す力が育成されるであろう。

3 仮説に迫るための方策

(1)

場面や状況、目的に応じて、既習表現を柔軟に、かつ即興的に活用する生徒の育成
→「様々なシチュエーションごとに、有用な英語表現を知り、適切に使用するとともに、既習表現を活用して自分の思いや考えを伝えることができる」と定義する

<手立て①>ピクチャーカードとシチュエーションを提示し、場面や状況を明確にする。

「場面や状況、目的に応じる」ことを目指すための手立てとして、ピクチャーカードを使用する。特定の場面をイメージさせるための視覚的な補助として有効であると考え。活動やその後の振り返りを通して、シチュエーションごとの有用な英語表現を知り、適切な使用を目指すとともに、既習表現を活用して自分の思いや考えをより正確に伝えることを目指す。

2人の人物が映っている写真を提示し、その2人になりきってスマートトークすることを伝える。ピクチャーカードは、場所や時間などの情報のほか、登場人物の表情や態度からも会話内容のヒントが得られる可能性があり、生徒のコミュニケーション活動を盛り上げる一因となりうる。ピクチャーカードを提示したのちに、シチュエーションを示す。ピクチャーカードから得られる視覚的な情報だけではなく、シチュエーションを示すことで、登場人物の内情を知り会話の内容をよりイメージしやすくさせる。



資料1 ピクチャーカードの例

Situation

夕食を食べながら、新婚旅行の行き先を話し合っています。それぞれ思いを主張して、自分も相手も納得のいく旅行先を決めましょう。

資料2 シチュエーションの例

- (2) 場面や状況、目的に応じて、既習表現を柔軟に、かつ即興的に活用する生徒の育成
→「「“○○…”って言いたい!」「学習したあの文法(フレーズ、単語)が使える!」過去にインプットし、インテイクされたものの中から選択することができる」と定義する。

<手立て②>生徒の振り返りから、学習した英語で表現可能なものや、有用な表現を個人と全体にフィードバックする。

「既習表現を柔軟に活用する」ことを目指すための手立てとして、リフレクションカードを活用したフィードバックの充実を目指す。ペアによるスマートトークをタブレットで録音させ、発話した内容をリフレクションシートに文字おこしさせる。自分の取組を振り返らせることで「ここではこう伝えなかった、どのように表現すればいいのだろう」「次はこう言ってみよう、どのように表現すればいいのだろう」など、「伝えたいけれど表現できなかった(できない)」もどかしさを表出させ、それらを「もっと伝えたい」という意欲へと転換させたい。①生徒が伝えたい表現をリフレクションシートに示して個人に返すこと、②既習事項で思い出してもらいたい表現や、そのシチュエーションで有用な表現を学級全体に返すこと、をフィードバックの2本柱とする。

- (3) 場面や状況、目的に応じて、既習表現を柔軟に、かつ即興的に活用する生徒の育成
→「あいづちや感嘆詞を使い、相手の話にリアクションをしながら、接続詞を用いて息の長い英語を話すことができる」と定義する。

<手立て③>・有用なあいづち表現、感嘆詞、接続詞のフラッシュインプットを行う。
・あいづち表現、感嘆詞、接続詞の有効的な使い方をフィードバック。

「既習表現を即興的に活用する」ことを目指すための手立てとして、リアクションドリルを行う。不適切な間をあげないためには、あいづちや感嘆詞を使い、相手の話にリアクションをすること、接続詞を用いて息の長い英語を話すことが必要であると考え。そのために、会話をするときに有用なあいづち表現、感嘆詞、接続詞の導入と反復練習を行う。また、生徒の発話の中に有効的なあいづち表現、感嘆詞、接続詞の使用

You know ...

聞き手がすでに知っている事実を共有するときを使う

You know, Hokkaido is famous for its delicious sea food.

資料3 リアクションドリルの例

があった際には、上記のようにフィードバックを行うことで、学級全体に使用例を示すとともに積極的な活用を促す。

4 検証・評価の方法

(1) 英会話の数値化

相手と1分間会話し続けられたか、相手と何往復やり取りすることができたか、会話の中で、自分は何文（あるいは何語）発話することができたかなど、生徒にとって一番わかりやすい指標である「数字」で自身の活動を評価させることで、生徒に目標をもたせ、達成感や次時の目標を与える一助とする。

(2) 振り返り、アンケート

事前に行う英語の授業に関するアンケート調査やテストの結果等から、生徒の実態調査・分析・把握を行う。検証は、生徒の発言、ペアワークの様子、ワークシートの記述、振り返り等により、生徒が英語で主体的にコミュニケーションができたかどうか、即興的な英語力が身に付いたかどうかを考察する。検証実践の後にアンケートを実施し、事前調査との比較・分析を行い、本研究の仮説を検証していく。

5 研究の実際

(1) ピクチャーカードの効果

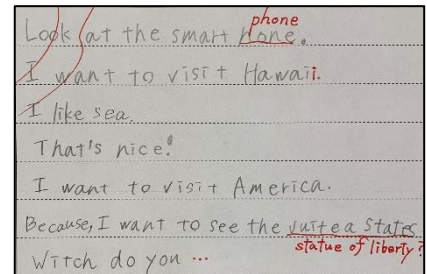
生徒にピクチャーカードを提示し、シチュエーションを示したうえで、ペアで1分間の small talk をさせた。“登場人物になりきって”という条件であったため、自分自身の思いや考えを表出させるときとは異なり、深く考えすぎずに広くイメージを働かせて会話内容を考えていたし、羞恥心なく自由に発言する様子が見られた。また、シチュエーションを与えることで、会話の目的が明確となり、目的を達成しようと言葉を続けようとする様子が見られた。なにより、ピクチャーカードやシチュエーションを定期的に変えることで、新鮮な気持ちで意欲的に会話活動に取り組む姿が印象的であった。会話の内容に焦点を当てると、自分の意見を主張するだけで、相手の話す内容の聞き取りが甘く、相手の意見に対するリアクションに乏しいことがわかる。相手意識に乏しく、相手ではなく、画面やタブレットを見ながら話したり聞いたりする姿も見られた。相手とのやり取りの往復数、語彙数に明確な目標を定めておらず、ゴールが見通せなかったことも、1分間対話を続けることが困難であった要因であると感じた。

相手のいる会話であること、その相手の話を聞き、リアクションを取ること、相手の話を聞いて自分の意見を広げたり、深めたりすることを意識させなければいけないと感じた。

(2) フィードバックの効果

“「行ったことがある」と伝えなかったけれど、伝えられなかった”という生徒の振り返りをフィードバックした。「行ったことがある」は既習表現である現在完了経験用法 ‘I have been to ~.’ で伝えられることを個人に返し、学級全体で共有した。また同時に、「〇回（行ったことがある）」や「行ったことがありますか」、「（一度も）行ったことがない」も復習をすることで、必然性をともなって既習表現を復習することにつながり、表現の幅を広げることに繋がった。また、特定の文法をフィードバックす

資料4 small talkの様子



資料5 文字起こした生徒の発話内容
(small talk 1回目もの)

① 経験用法

~したことがある

I have eaten durian

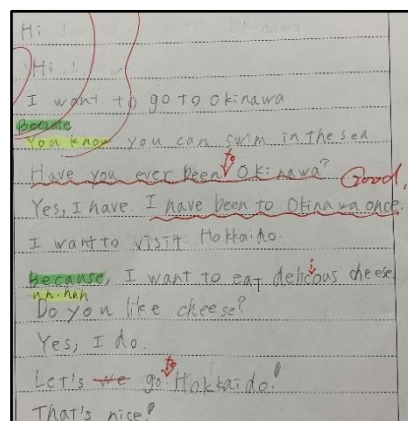
回数を表す単語

once.
twice.
~ times.

資料6 フィードバックに使用したスライド

ることで、以前に学習した文法を思い返し、自分の表現をブラッシュアップしようとする意識が芽生えた。

フィードバック後の、同振り返りをした生徒の small talk を見てみると、自分の表現をブラッシュアップしてやり取りを試みる様子が見られたし、他のペアでもフィードバックされたことを生かして活動に取り組む様子が見られた。ただし、全体にフィードバックすることで、その表現を使用しなくてはならないという固定概念が生まれ、本来自由度が高いはずの会話活動が制限されてしまっている様子がうかがえた。フィードバックされた表現はあくまでも一例であること、自分思いや考えを大切にすることを伝えなければいけないと感じた。



資料7 フィードバック後の発話内容
(small talk 3回目のもの)

(3) あいづち表現、感嘆詞、接続詞の導入

あいづち表現、感嘆詞、接続詞を導入し、反復練習することで、それらを意識し、使おうとする生徒が増えた。必然的に相手の話を聞き取ろうとする意識が高まり、相手とアイコンタクトをしたり、問い直したりする生徒も現れた。未だに会話の途中に間があることは事実であるが、相手の話に対してリアクションをすること、自分の話に対してリアクションがもらえることは、英語でやり取りする意欲を高めるのに有効であった。しかし、むやみにあいづち表現を使う生徒や、適切な使用をする生徒が見られた。英語のあいづちは当然のように、日本のそれとは異なるニュアンスで使われるため、発音や意味のインプットだけではなく、モデルを提示する必要があった。JTE と ALT の会話をモデルとして示したり、海外の映画やドラマなどの一場面を見せたりすることで、発音や意味だけでは伝わらない使用場面をイメージさせることが必要であると感じた。



資料8 small talkの様子

文字では伝わらないやり取りの“間”がどうであったかを検証するために、会話を録音させたものを提出させることも手段の一つとして有効であったのではないかと考える。自然な間で、表現豊かなペアの会話をロールモデルとして学級全体で共有することで、目指す姿を明確にし、次時の目標や課題設定の一助となると考える。

(4) インフォメーションギャップの導入

上位の生徒は自分で意見を考え、それを伝え合うことでやり取りを成立させていた。しかし、下位の生徒は活動の自由度が高ければ高いほど困難を抱える傾向にあった。英語で表現できないことはもちろん、自分の意見（会話の内容）を考えることが難しい様子が見られた。そこで、あらかじめインフォメーションを与え、その課題を解決しようと試みた。相手に伝える必然性をもたせるために、インフォメーションギャップを活用することとした。相手の知らない、かつ相手に伝えなければならない情報をペアのA(仮)とB(仮)に与え、“なりきり small talk”においてペアでやり取りする上での条件とする。当単元で学習する文法や語彙を使うことにとらわれすぎず、あくまで自由度の高い中で既習表現が出やすいインフォメーションを与えることが望ましいと考える。

資料9 インフォメーションギャップの例



自分の伝えなければいけない情報があるため、会話の内容に悩む生徒は減ったように感じたが、自分のもつインフォメーションに付随した理由や根拠などを英語で表現することが難しいようで

あった。しかし、必然的にやり取りの往復数、語彙数が増え、英語で自分の意見を伝えるという第一目標は達成していたように感じる。自分の情報の裏付けとなる理由や根拠、相手の話す内容に対する受け止め方と返し方の表現の仕方を、実践を重ね、フィードバックを大切にしながらブラッシュアップしていくことで、より充実したやり取りとなることが期待できる。

6 成果と課題

(1) 英会話の数値化から

< 成果 >

資料 10 会話の往復数、語彙数字の変化（抽出ペアの数値）

		初回の small talk	2 回目の small talk	3 回目の small talk
レストラン (新婚旅行 の行き先)	会話の往復数	1.5	2.0	3.5
	語彙数(生徒 A)	16	22	26
	語彙数(生徒 B)	15	18	26
駅前 (おすすめの 和菓子屋)	会話の往復数	2.0	2.5	3.0
	語彙数(生徒 A)	18	24	26
	語彙数(生徒 B)	13	14	16
教室 (異性の好み のタイプ)	会話の往復数	3.0	3.5	4.0
	語彙数(生徒 A)	20	22	23
	語彙数(生徒 B)	21	21	24

- ・ 振り返りのフィードバックや、あいづち表現などのフラッシュインプットをすることで回を追うごとに新たな表現を取り入れて活動に取り組む生徒が増えた。その結果、必然的に会話の往復数や発話した語彙数が増加した。
- ・ 生徒から「こう言いたかった」「こう伝えたい」といった振り返りが多く寄せられ、フィードバックが活動に対する意欲の向上につながった。
- ・ あいづち表現や感嘆詞の知識が増えていくことで、相手意識が高まり、相手の意見を傾聴したり、リアクションをとったりする姿が多く見られるようになった。その結果、会話を楽しむ姿勢が生まれ、活動に充実感を覚える生徒が増えた。

< 課題 >

- ・ 各手立てにおいて、生徒に与える情報の量が多すぎたことが考えられる。自由度の高い、即興的な会話を実現したかったのにもかかわらず、意見や表現を限定的にしてしまった。生徒の成長を促すための、必要最小限な情報提示で行うべきであった。
- ・ フィードバックにおいて、今回は文字によるもの（リフレクションシートの画像やスライド）が主であったが、ICTを活用し、動画や音声によるものを取り入れるべきであった。他のペアの流暢で表現豊かなもの、あるいは逆に改善点が明確で、自分自身のペアにも同様の改善点が存在するものを放送することで、それらから学びを得て、自分の英語表現に磨きをかけることが可能であったと考えられる。
- ・ 学習指導要領でも述べられている会話をするときの「不適切な間」とは何なのかの定義づけがあいまいであった。会話時に生まれる間を埋めようとあいづちや感嘆詞などの表現を導入したが、会話の中には本来『間』が生じるものであり、すべての『間』が「不適切」だとは限らない。本研究では、すべての『間』を埋めるような指導をしてしまったため、生徒の会話は急いで話すような印象を受け、自然な会話とは異なるものになってしまった。どのような『間』が「不適切な間」に当たるのかを明確にし、その「不適切な間」が生じたときにはどのような表現でその間をつなげばよいのかを考えさせなければいけなかった。

(2) 振り返り、アンケートから

① 振り返りから

・意外と英語が話せると思った。

その時に学習した文法を使った限定的なやり取りではなく、シチュエーションは限定しているものの、自由度が高く、自分たちの発想がそのまま英語表現となり、会話になるという体験を通して、生徒にとって新しい“英語に親しむ”活動になったと感じる。回を追うごとに意欲的な態度で参加する生徒が増えたのも、自分の思いや考えを英語にすることができたという達成感が得られたからではないかと推測する。

・自分の意見に相手が賛成してくれて嬉しかった。

あいづち表現や感嘆詞を導入することで、相手の言葉を聞こうとする姿勢が生まれた。逆に、話し手は聞き手のことを考えて言葉を紡ぐようになった。自分の思いや考えが相手に伝わり、それに対して相手がリアクションをすることで、自分の英語が伝わったという成就感が得られ、それが自信に変わったのではないかと考える。ペアを変えながら、多くの生徒とやり取りをさせたことも、表現の幅を広げる効果があり、会話をより充実させることができた要因であったと感じる。

・同じような場面があったら今日の英語を使ってみたいと思った。

生徒のいずれかが将来海外に行ったときに、生活の様々な場面や状況で練習してきた英語が生きることを願っての実践であった。様々なシチュエーションを疑似体験することで、有用な表現をインテイクし、アウトプットする練習をすることができた。日本で英語を話す機会多くはないが、海外での英語使用の可能性が向上したことを願っているし、生徒が外の世界へ目を向ける一助となったことを期待している。

② アンケートから

資料 1 1 生徒のアンケート結果の分析

4月のアンケート 身につけたいと思っている技能	身につけたい技能				
	聞く	話す(発表)	話す(やり取り)	読む	書く
	19%	12%	17%	24%	28%
10月のアンケート 身につけてきたと思っている技能	聞く	話す(発表)	話す(やり取り)	読む	書く
	11%	14%	25%	22%	28%

「なぜその力がついてきたと感じますか」(「話す(やり取り)」の領域からにおける生徒の記述から

- ・授業でペアで話す練習をしているから。
- ・まだ使いこなせないけど、いろいろな表現があることを勉強しているから。
- ・習った英語を使って、少しずつ話せるようになってきたから。
- ・この前テリーと少しだけ雑談できたから。※文中の「テリー」はALT

アンケートでは、“話す”ことに対して肯定的な意見が見られた。最初は話すことに抵抗を感じていた生徒も、相手とやり取りする経験を通して自信をつけ、話すことに対する意識の変容が見られた。伝える楽しさ、伝わる楽しさを実感させる取組として、本実践は有効的に働いたと考える。

<参考文献>

- ・文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』開隆堂(2018)
- ・橋本慎一「スピーキング活動に必要な「練習」とは」『英語教育 2016年 9月号 第65巻第6号』大修館書店(2016)